

## 第2回 J-GBF 行動変容ワーキンググループ 議事要旨

1. 日時：令和4年3月28日（月）17:00～18:30

2. 場所：オンライン開催

3. 出席者

（座長）東北学院大学経済学部 准教授 佐々木 周作

（専門委員）国立環境研究所 生物多様性領域 主任研究員 久保 雄広

（専門委員）株式会社バイオーム 代表取締役 藤木 庄五郎

（発表者）名古屋市環境局環境企画部環境企画課 施策推進係長 毛利 崇

（J-GBF 委員・関係者・一般傍聴者：約60名）

経団連自然保護協議会

日本生活協同組合連合会

国際自然保護連合日本委員会（IUCN-J）

公益財団法人 日本博物館協会

国連生物多様性の10年市民ネットワーク

一般社団法人 CEPA ジャパン

SATOYAMA イニシアティブ推進ネットワーク

生物多様性わかものネットワーク

Japan Youth Platform for Sustainability

生物多様性自治体ネットワーク

農林水産省

消費者庁

4. 開会

開会挨拶 環境省 谷貝 雄三 室長

・次期世界枠組みを検討するジュネーブ会合では、ユースや行動変容が改めて注目浴び、議論が進捗してきた。

・本日はナッジを用いた行動変容の結果の報告を行う。

・生物多様性の機運が大いに盛り上がっていく中で、来年度、我々は何ができるか、どんな取り組みができるか、お知恵を頂きたい。



## 5. 議事

- (1) MY 行動宣言に関する調査検討結果の報告と今後の方向性について
- (2) 事例発表
  - ・ 行動変容への取り組み事例紹介（藤木専門委員）
  - ・ 生物多様性の主流化に向けた名古屋市の取組（名古屋市 毛利様）
- (3) その他

## 6. 議事概要

(1) MY 行動宣言に関する調査検討結果の報告と今後の方向性について  
事務局から、以下の内容について説明した。

- ・ 資料1 「MY 行動宣言に関する調査検討結果の報告と今後の方向性について」



### ○質疑応答

(佐々木座長)

- ・ 今回の事業でどの点がナッジなのか補足する。
- ・ MY行動宣言シートについては、自分がどういう行動に取り組むかを具体的に書き込んでもらうという工夫が、意向を強めるコミットメントというナッジの介入になっている。提出したものが調査者側に見られるということも作用している可能性がある。応用するにあたっては、人と人のインタラクションが発生するような場所に取り入れるのが良いと思った。
- ・ スーパーの例は「〇%の人が～をしている」という他者情報が効果を持つことを期待している。色々な分野で採用されているナッジ。
- ・ スーパーの売り上げデータ結果と、事後アンケートでの効果の出方が大きく違うので、そこは重要な点だと思う。売り上げデータの方を重視すべきではないか。
- ・ 多くの人に生活の中で、実際購入してもらうためには、もっと工夫が必要である。

(国際自然保護連合日本委員会/ラムサール・ネットワーク日本 安藤氏)

- ・農水省版のMY行動宣言がよくできている。農業も一緒にやるという考えはあるか。一緒にやる方が効果が出るのではないか。

(事務局)

- ・MY行動宣言については、農水省だけでなく他の NPO 含めてそれぞれのバージョンでシートを作成、呼びかけをしていただいている。結論の中で事務局として提示したように、対象となる方や行動を踏まえて宣言シートを工夫していくべきだと思う。

(国連生物多様性の10年市民ネットワーク 宮本氏)

- ・25 ページ結果について、男性の10代について、見かけ上は100% (N=14)、ここについて言及が無かったのは、Nが少なくて有意かどうか分からないという事か。

(事務局)

- ・特に10代については母数が少ないので、このページの中では言及していない。

(国際自然保護連合日本委員会 道家氏)

- ・MY行動宣言の今後について、一つには内容そのものの検討が必要。生物多様性の損失につながる行動を変えるためのツールとして、世界的なレポートにあるような生物多様性の損失要因や変えなければならない点などと今のMY行動宣言が合っているか。宣言の中身の確認作業が必要。
- ・もう一つは、運用・展開の仕方。農水版や子ども版など運用で広がっていく部分について、言葉をどこまで変えて良いのか、フレームの中でどう活用していくか、広げていくか。
- ・ワークショップ形式で議論して改善していく時に、この二つの視点が必要。片方ずつ精査することが必要だと思う。

(事務局)

- ・ワークショップで議論する際に、参考にしたい。

(久保委員)

- ・アンケートで調査した行動が、実際に生物多様性の保全につながっているかは議論をして詰める必要がある。
- ・調査のナッジ部分について介入している部分は、あくまでアンケートなので、宣言した後のアンケートも一種自己肯定のためにやったというような、行動とはまた別の「意識」のエンカレッジになっているのではないか。行動としてこの後、評価できるようになっているのか、それを意識して調査されているか。頻度についてもアンケートで聞いているか。

(事務局)

- ・あくまでもアンケートで、どの程度行動が変わったかを確認している。実際の行動がどこまで変わったかは、この手段ではフォローできていないのが実情。
- ・頻度までは聞いていない。直近1か月に行動したかどうかの確認のみ。

(佐々木座長)

- ・生物多様性の保全に繋がっているかどうかが大変なことだが、それをどうやって実証的に評価するかはすごく難しい課題だと思う。手続きと検証方法について、久保委員に後日でよいので教えて欲しい。
- ・自己肯定感のエンカレッジについては、記入型の調査でおそらくあると思う。

(国連生物多様性の10年市民ネットワーク 宮本氏)

- ・元々、MY行動宣言は生活者を対象にしている。IPBESの分析を踏まえるなら、政府、自治体、企業など様々な主体に対して、GBFの行動目標14、15、16で議論されていることに対して幅広く検討すると良いと思う。

(藤木委員)

- ・スーパーの調査について、売上げが上がらなかったというのは、すごく重要な結果。ここで売上げが上がったと言えると、スーパーが自ら導入するきっかけになる。理由の分析は次につなげるためにも、かなり丁寧にやる必要がある。

(事務局)

- ・重要な観点だと思う。当初は事務局も、売上含めて効果が出ると思って設計したのだが、結果は思ったより変わらなかった。今後どういう調査をするかは検討が必要。

(佐々木座長)

- ・色々な可能性があると思う。普段から実施している、生物多様性に関わらない広報の効果と比べてどうかなど、補足材料を提供いただきながら、まずこのやり方に可能性があるのかどうかから検討するのが良い。

(国際自然保護連合日本委員会/ラムサール・ネットワーク日本 安藤氏)

- ・生協はカタログを通じて認証マークや産直、オーガニックなどの広報をしている。それがどう売れて、消費者・組合員に伝わっていくか、というノウハウ持っていると思う。生協の方もいるので、ワークショップに参加してもらえれば、非常に参考になると思う。

## (2) 事例発表

藤木専門委員、名古屋市の毛利氏より、以下の事例発表をしていただいた。

- ・藤木専門委員

ご発表「行動変容への取り組み事例紹介」



- ・名古屋市環境局 毛利様

ご発表「生物多様性の主流化に向けた名古屋市の取り組み」



## ○質疑応答・意見交換

(佐々木座長)

- ・藤木委員に質問。生き物の写真・情報をコレクションする行動と親和性のある行動で、一緒に促せたらいいが現状では難しい例などがあれば教えていただきたい。
- ・毛利氏には、無関心層にどう行動を起こしてもらうか、関心を持ってもらうかという点で、名古屋市が取り組んでいることがあれば教えていただきたい。

(藤木委員)

- ・健康の行動、ウォーキングなどとは、計測する指標が全然違うので、まだはっきり結び付けられていない。別の指標を二つ用意すると体験がシンプルでなくなってしまい、どっちつかずになり兼ねない。やりたいけど、踏み込み切れていない。

(毛利氏)

- ・無関心層への働きかけは自治体側としても一番苦労している。
- ・環境デーは、繁華街の一角にある公園でやっているのでも、通りがかりの人で興味ない人もふらっと立ち寄れる。無関心層でも参加してもらえる内容にしている。
- ・別分野との連携も大事だと思う。一例として、伝統工芸と生物多様性を結び付けて啓発をしている。

(国連生物多様性の10年市民ネットワーク 宮本氏)

- ・事務局に質問。環境省で実施している生きものログやモニタリング1000などとバイオームのような大規模な市民の調査データをどう連携させていくのか。既にやっている場合はその取り組みについて教えていただきたい。また、海外の市民調査でも日本のデータがあるので、そういうものも同じく活用したら良いのではないか。

(事務局)

- ・同じ問題意識で実施したことはあるが、市民調査のデータについては、情報の信頼性や情報の使用権が大きなネックとの指摘があった。役所や民間の方で、標準フォーマット、ある程度標準化を図りつつ連携していくことになると思う。
- ・生物多様性センターを中心に基礎調査をベースとしつつ民間とのデータ連携を徐々に進めていく。

(藤木委員)

- ・連携については、ぜひ今後、進めていきたい。

(久保委員・チャット)

- ・マイナーな点だが、最近絶滅リスクを示す「レッドリスト」だけでなく、回復（復元）を示す「グリーン・ステイタス」も発表された。モニタリングの参考にして頂きたい。

(日本生活協同組合連合会 新良貴氏)

- ・生協では店舗で、子ども向けにエシカル探検隊、エシカルキャンペーンをやっている。ここでキーワードになるのは、探検やクエストだと思う。
- ・また多くの生協がコープの森を持っており、田んぼの生き物調査なども展開している。最近の悩みは、コロナ禍の影響もあり子どもが来ない、人が集まらない。このアプリの活用は新たなコンテンツになると思う。企業の森を持っているところも結構あるので連携して広がる可能性があると思う。

(藤木委員)

- ・既存のユーザーもたくさんいるので、クエストにすれば人も集まると思う。素晴らしい取り組みと連携してできると良いと思う。
- ・田んぼの調査についてはこれまでに、自治体やJAの関係でいくつか実施した。人、データを集め、結果的に農作物のブランド化にうまくつながるところまで描きたい。

(経団連自然保護協会 谷口氏)

- ・経団連自然保護協会では昨年、会員企業の若手職員を対象に環境リーダー育成のオンラインセミナーをアイナチュラリストのアプリを使って行った。
- ・藤木さんへの質問は、企業との連携事例について1回、2回であれば参加してくれると思うが、継続して、より発展的に興味を持ってもらうために、効果的な手法やヒントがあれば教えていただきたい。

(藤木委員)

- ・組織としての継続は、どれだけ自社の利益や経営の課題に活動をつなげられるかという点がポイント。ちゃんと収益化できるかなどを考える。
- ・個人、参加者は、一回参加して少しでも価値観が変わる、人生がちょっと変わる体験が提供できれば、また行きたいと思ってもらえる。体験をどう設計できるかが重要。

(3) その他

事務局から、以下の内容について説明した。

資料4 「行動変容WGの今後の進め方について」

(佐々木座長)

- ・生物多様性保全の行動と親和的な行動とはどういうもので、どの組合せにポテンシャルがあるのかを探究することは重要。生物多様性に関連する事業の経済的な持続性とも関りがある。
- ・皆様の具体的なアイディアはメールでいただきたい。

以上